
Butterfly

桜桃

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Butterfly

【Nコード】

N4326X

【作者名】

桜桃

【あらすじ】

新一の潜入調査モノ。

江羅利高等学校に通うギャル、

早乙女アゲハの父に麻薬密売の容疑が掛かった。

しかし、証拠は不十分。

アゲハの友達になり、証拠を見つるという仕事を新一は任された。

新一はアゲハに近づくが、アゲハは相当な厄介もので・・・。

Butterfly 1

「適役がおらんだよ・・・」

「はぁ・・・」

「で、この役を工藤君にやってほしいんだけど・・・駄目かな？」

「・・・え？」

警視庁の出来事であった・・・

「え？潜入調査？」

「そう。」

「なんの？」

「江羅利高校に通ってる生徒の親が
麻薬密売の容疑がかかってるらしい。
なんとか証拠を掴みたいらしいんだ・・・
早乙女・・・って言ってたかな。」

「で、新一に・・・」

「その生徒に近づいて、家に潜り込み・・・
麻薬を見つける。」

「危険じゃないの？」

「危険・・・じゃない。」

「嘘ばかり。」

「あ・・・やっぱりわかるか。」

「当たり前でしょ？」

蘭は心配そうな顔で新一を見つめた。

「その生徒って女の子？」

「さあな。俺、聞いてねえもん。」

「浮気、しないでよね。」

「しねーよ。」

「浮気したら私だってしてやるんだから。」

「それはマジで勘弁。」

「約束だからね。」

「ああ。」

「じゃ、荷物詰めなきゃ！」

新一、しばらくマンション借りるんでしょ？」

「まあな。」

先生とかクラスメイトに押しかけられたら困るし。」

「うん。」

「しばらく、あえないね。」

「電話ならいくらでもできんだろ。」

「けど・・・」

「心配すんなよ、一応一ヶ月の予定だからさ。」

「わかった。」

出席日数は大丈夫？」

「ああ。先生たちもわかってくれたから・・・」

向こうで出席した分、こっちにしてくれるってさ。」

「それっていいの？」

「いいんじゃないの？」

新一の適当さに蘭は頭を抱える。

「大丈夫かな、これで・・・」

「唯一心配なのは、料理だよな・・・」

「レトルトとかお惣菜は駄目よ？」

「はいはい・・・」

潜入調査というのはあまりにも急な話で。
荷物を詰めるのに一生懸命になっていた。

「制服は？」

「ん？ああ、警部たちがそろえてくれるらしい。
マンションの家具も全部。」

「そっか。なら、安心だね。」

「ああ。」

「怪我だけ、しないように。」

「わぁーってるよ。」

「・・・」

急に黙り込む蘭を新一は不思議そうに覗き込んだ。

「どうした？」

「・・・ねえ、新一・・・」

今日、泊まっていきたい。って言ったら・・・だめ？」

「え？」

「やっぱり、一ヶ月も離れるの・・・さびしいもん。
今日くらい、一緒にいさせてよ・・・一ヶ月分。」

「だめなわけねえよ。」

でも、おっちゃんがさ・・・」

「お父さん、今日は町内会の温泉に行っていないの・・・」

「そっか・・・」

んじゃ、今日は泊まってけよ。夕飯よろしくな。」

「うん！」

「あ、それと・・・今渡すのも変なんだけど・・・」

新一が鞆をこそそとし始めた。

「なに、コレ。」

「合鍵。」

「こここの？」

「ああ。」

「もらっていいの？私が。」

「あつたりめえだろ？」

今日つくったんだ。その後潜入調査って聞かされて・・・」

「タイミングが悪かったね。」

「だろ？」

ま、一応渡しとく。

あつ、掃除しろ、とかじゃねえからな？」

「わかってるよ。」

蘭は嬉しそうに鍵を眺めた。

Butterfly 1 (後書き)

新連載始めました!!

これから、いろんなことがあります・・・
あるんかい・・・
どうぞ、宜しくお願い致します

Butterfly 2

「えー、今日から転校してきた藤峰君だ。」

辺りで「工藤新一に似てる・・・」

と口々に言い合ってた。

（そりや似てるよな・・・本人なんだから。

まあ、変装してたら、本人だなんて気づくやついねえと思っけど。

）

「え？偽名？」

「ああ。どうすればいい？」

前の晩、新一は蘭に相談していた。

「江戸川コナンくんがいいんじゃない？」

「お前、嫌味だろ。」

「だって・・・」

「コナンなんてからかわれるに決まってる。」

「別にいいんじゃない？」

お父さんがコナンドイルのファンだったんだ。で。」

「完璧嫌味だよな、それ。」

「別にー？」

蘭は面白そうに笑った。

「あ、いいの考えた！」

「え？」

「じゃ、藤峰、簡単に自己紹介。」

「はい。帝丹高校から来ました。」

ふじみねしん
藤峰新です。これからよろしくお願いします。」

「はい、拍手！」

ぱちぱち

（藤峰新・・・まったく、蘭の考えそうな名前だよな・・・。）

『だって、工藤君って・・・新一って・・・他の女の子に言われるの嫌なんだもん。』

（なーんて、いつになく素直に言うし・・・）

「じゃ、藤峰の席は・・・早乙女の隣だな。」

ピクリ

『早乙女』の言葉に新一は耳を傾けた。

(こりゃ、好都合・・・)

情報では、優しく、おとなしく、清楚で可憐。

大和撫子タイプらしい。

「あそこにいるのが早乙女だ。」

そこに座っていたのは・・・

赤毛・・・多分、染めたのだろう。

パーマ。

耳にはピアス。

制服はだらしない。

綺麗な顔立ちなのはわかる。

が、化粧をしていて凄くもったいない。

「よろしく。」

（なんか、情報と違うような・・・）

席に座る際、新一が軽く声をかけた。

「チッ」

誰かが舌打ちする。

主は隣に居る、『早乙女』と呼ばれた女だった。

「気安く話しかけてんじゃねーよ。」

ボソッ

と言っていたが、新一には完璧に聞こえていた。

(情報とまったく違うように思うのは俺だけか?)

「数学の時間」

「早乙女さん。俺、この教科書まだ無いんだ。
見せてもらっていいかな？」

これは、仲良くなるためにわざと忘れてきた。
もちろん、教科書がまだ無いなんてことはない。

少なくとも、同じ県内だからだ。

ドサッ

新一の机に教科書が乱暴に置かれる。

「え？」

「あたし、使わないから。」

「でも、授業・・・」

「うつせえな、あたしは授業する気がねえんだよ。
わかったら、話しかけてくんな。
んで、近寄んな。やさ男。」

（か、可愛くねー・・・）

新一は顔を引きつらせた。

Butterfly 2 (後書き)

こんばんわ　　桜桃です。

アゲハちゃん、一筋縄ではいきません。

ただのギャルじゃないんです。

まだまだ挫けちゃいませんよ、新一は・・・！(笑

Butterfly 3

「俺、相沢ってんだ！よろしくな。藤峰。」

「ああ、よろしく。」

「私、三神杏里。よろしくね、藤峰くん。」

何人か、新一の机に集まってきた。

隣の『早乙女』はいない。

「あのさ、一つ。聞きてえんだけど。」

「なーに？」

「隣のやつ。」

「まさか、藤峰くん・・・。」

「アゲハを好きになっちゃった？」

「だよね・・・見た目は可愛いもん。早乙女アゲハ。」

「名前もカタカナつてところが、カッコいいよね。」

「いや、別に好きとかじゃねえんだけど・・・
ただ無愛想な奴だな、って思ってたよ。」

「だよな！。」

俺、1年の時初めて早乙女見てさ、
一目ぼれしたもん。まさかああいう奴だと思わなかったけど。」

「誰かの話しじゃ、清楚で可憐で大和撫子タイプって聞いたんだけど。」

新一の言葉をバカにしたように笑った。

「えー、誰から聞いたの？」

全く正反对じゃん、早乙女アゲハ。」

「私らも結構街では顔の広いギャル一味なんだけどさ。
あの子もつとすごいもんね。」

「うんうん。昔暴走族の上の人と付き合ったこともあるらしいし。」

「ヤクザとも付き合ったらしいよ。」

「そんな情報まであるのかよ。」

「うわさでね、結構流れるのよ。」

「怖い人と付き合ってるから、アゲ八には誰も近づけないの。」

「それに、家も金持ちだしねー。」

この学校だってアゲ八の両親が資金出したらしいし。」

「この周辺のカフェや喫茶・・・デパート・・・
ほとんどが早乙女家の資金だから、誰もアゲ八には文句言えない
の。」

（なるほどな・・・）

「でも、アゲ八の家って何やってんのかしら。」

ほーんとなぞ。どっかの財閥・・・ってわけでもなさそうだし。」

「不動産屋とかじゃないの？」

「かもね。」

「毎月のお小遣いとか半端ないんだろうね。」

「香水も化粧品も全部高級品だもん。」

「そんなこと、わかんのかよ。」

「わかるわよ。」

「女ってこえー。」

新一はずっと考えこむ。

「アゲハの話しより、ずっと面白い話あるんだけどさー。」

「えーなにになに？」

「A組の中山紀伊子！彼氏できたらしいよ。
しかも社会人で医者！」

「マジー！？」

新一が考えている隣で、バカ騒ぎが始まった。

ガラッ

「起立、気をつけ、礼。」

「お願いします。」

「着席ー。」

「おっと・・・早乙女はいないのか？」

「多分サボりだと思いまーす。」

「そうか。」

教師は何事もなかったように授業を始める。

この学校で彼女に口出しできる人など、いないのであろう。

「この問題を、藤峰。」

「はい。」

すらすらと黒板に書いた。

「正解。」

お前らも藤峰を見習えよー。」

「ふあーい。」

「ほーい。」

「じゃ、教科書36ページを・・・。」

「先生っ」

新一は声をあげた。

「体調が悪いんで、保健室行って来ていいですか？」

「ああ、わかった。」

（取り合えず・・・早乙女アゲハを探るか。）

〃
〃 屋上 〃
〃

「どこにもいねえとなると・・・」しかねえよな。」

ガチャ

「運良く鍵が壊れてるし・・・」

「早乙女・・・いるか？」

「・・・んだよ、お前・・・」

「昨日転校してきた・・・」

「知ってただよ、そんなこと。」

あたしが聞きたいのは、何でここにいらかったこと。
あたしの睡眠時間を邪魔しないでくれる？」

「・・・いいよな、ここ・・・
ちょうど風当たりがいいし。」

「つて、話し聞いてねえだろ・・・
ちゃっかりこっちまで来てるし。」

「俺も向こうの学校で結構サボってた。」

「え？あんたも問題児なの？」

目を丸くさせて聞いてきた。

「・・・いや、授業のレベルが合わなくて。」

「嫌味かよ。」

「まあ、その度怒られてたけどな。」

「ふーん。」

「あんた、不思議だね。」

「何が？」

「あたしを見る目が他と違う。」

「目？」

「金持ちの娘とか、問題児とか、不良とかを見る目でも・・・顔や体目当てでもない・・・あんた、ただ者じゃないでしょ？」

ギクッ

（何で女はそう、勘がいいんだろうな・・・）

「ただ者だよ。」

「ま、そうだよね・・・やさ男にしか見えない。」

「あのさ、やさ男とかやめてくれない？

俺、ちゃんと名前があんだけど・・・」

「・・・あたし、信用した人しか名前で呼ばないから。
あんたにはやさ男で十分。」

「あ、そ・・・」

（まだまだ手ごわいよな・・・）

「私、寝るから・・・とつとと出て行つて。」

「へいへい・・・」

「それと、あたしがここに居るってちくんなよ。
鍵を直されかねないんだから。」

「言わねえよ。」

俺のお気に入りの場所がなくなる。」

「勝手に気に入ってんじゃねえよ。」

「はいはい。」

ガチャン

ドアを閉めた。

B u t t e r f l y 3 (後書き)

上手くいきかけたんですけどね・・・

そんな簡単に上手くいくわけがないです!!

(おいおい・・・)

Butterfly 4

「ずっと思ってたんだけどよ。」

「？」

「藤峰ってミステリアスだよな。」

言い出したのは、
転校初日から新一にベッタリの植田智弘だった。

「自分のこと何にもはなさねえじゃねえか。」

「そうか？」

「勉強もスポーツも出来る・・・
でも、特技がなんだとか、苦手なのは・・・とかわかんねえじゃん。」

「言ってねえからな。」

「なあ、教えるよ。」

智弘はただを捏ねるように新一に言った。

「じゃあ、特技は？」

「リフティング、謎解き、射的、モーターボートと車の操縦。」

「へえ。車・・・」

「ハワイで父さんに教えてもらったんだよ。」

「ふーん。んじゃ、苦手なのは？」

「音楽、料理、母さん、おばさんに、園子、灰原に・・・」

「おいおい、人物になってるぞ。」

それに園子って？もしかして、彼女とか？」

智弘は瞳を輝かせた。

「ちげーよ、ただの友達。」

「そっか。じゃあ次は趣味。」

「読書。」

次々と出てくる質問に新一はめんどくさそうに答えた。

「嫌いなのは？」

「ラブストーリーとか。」

「嫌いそうだもんな。んじゃ尊敬する人・・・とか。
あ、いねえよな!!」

「両親とホームズ。」

「あ、いるんだ・・・」

「まあな。」

「じゃ、次は・・・好きなの。」

「蘭・・・」

「へー。」

新一は慌てて口をふさぐ。

「どうかしたか？」

でも、知らなかった。藤峰が花が好きなんてさ。「

「あ・・・花・・・」

「ん？違うのか？」

「い、いや！そうなんだ。」

（蘭が花の名前で助かった・・・）

「じゃあ、最後。嫌いなものは？」

「レーズン。」

「レーズン・・・俺、好きなんだけど。」

「あ、そう。」

「なんだよ、興味ねえみたいに！！」

「興味ねえし。」

「ふっじ〜み〜ね〜！！」

「男子って、仲いいよね。」

ま、それがうちのクラスのいいところだけど？」

「だね。」

ガラッ

「アゲハ・・・」

突然アゲハが入ってくる。

「なにー？遅刻？アゲハってばやるう！！」

「・・・んだよ。」

「え？」

「うつさいんだよ。あたしに話しかけないでくれる？」

「・・・なっ・・・！」

「何？なんか文句でもあるの？」

「いいよ、何でも言えば？あたしは別にどうってことないから。ただ・・・暴力でもふるってみな。あんた、即退学だからね。」

「・・・っ」

こう言われちゃあ、何もいえない。

「調子にのんなよ！」

あんたなんか、金と顔と体とつちゃえばあんたには何も残らないんだからね!!」

「で？」

「で、って・・・」

「結局、あたしがうらやましいんでしょ？」

「なに・・・っ」

「あたしは、金と顔と体があれば十分だから。

友情とか愛情とかそんな温いごっこ遊びなんてまっぴらごめんだしね。」

そう言ってアゲハは再び、教室から出て行った。

「ムカつく!!」

「気にすることないよ、奈々子。」

「そうだよ。あんたには皆がついてるんだからさ。」

「ありがとう・・・。」

（あいつ、相当な嫌われものだな・・・）

B u t t e r f l y 4 (後書き)

まだまだ続きます!!

アゲハちゃんの波乱な一日が・・・。

これからまた、平日は予約更新となります。
ご了承ください。

Butterfly 5

『T O 新一。』

おはよう！潜入調査、今日もがんばってね。
ちゃんと栄養取ってる？それだけが心配だわ……。
それじゃあね、藤峰新くん？

蘭。
』

「それだけってなあ。。」

蘭の文面に新一は笑みをこぼす。

「なーに見てんだよ、工藤」

「別になんでもねーよ。」

「なんでもねーわけねえだろ！見せろよ！..」

「無理。」

「即答かよ。」

見られたら、バレてしまう。

何もかもが。

「まあ、いいけどさー。」

それより、お前が早乙女を好きだって本当か？」

「はあ？」

「結構広まってるぜ？」

お前、早乙女のこと聞いてるだろ？」

「まあ、隣だから。」

「隣だからってあんな風にきかねえよ。」

誰だって好きだからだって思うに決まってる。」

「そんなもんか？」

「そんなもんだ。」

「別にそんな感情ねえんだけどな・・・。」

つぶやくように言った。

「お前がそういつつもりじゃなくても、周りはそう思ってたんだよ。」

智弘は呆れたように新一を見た。

ガ
チ
ャ

「あ
ん
た、
猫？」

「は
あ？」

「勝手にあたしの場所に居座ってさ。」

この屋上の鍵が壊れてるのあたしくらいしか知ってなかったのに。」

「へえ。」

「居るのはかまわないけど、あたしの邪魔だけはしないでよね。半径1m近づかないで。」

「はいはい。」

アゲハはお弁当を取り出した。

「結構家庭的な弁当なんだな。」

「うっさいわね。悪かったわね、お嬢様らしくなくて!」

「そんなこと言ってねえだろ。」

「あんたのお弁当はお母さんの手作り?」

「いや、そういうわけじゃ・・・」

「自分で?」

「それもちよつと、違う・・・」

「変なやつ。」

（まさか、お惣菜をそのまま入れた。なんて言えねえよな・・・
蘭にあれほどお惣菜はだめだって言われてた手前・・・。）

「お前つてさ、クラスのやつらにも今みたいに喋られねえのかよ。」

「・・・なによ。あたしがあんたに心を開いてる。
とでも言いたいわけ？」

「そうじゃねえよ。」

でも、クラスのやつらに結構冷たいだろ？お前。」

「冷たくしてんのはあいつらだよ。
あたしはちゃんとしてるつもりだったんだけど。」

「ちゃんとして・・・」

「話しはそれだけ？」

「あ、ああ・・・」

「じゃ、あたし寝るから邪魔しないでね。」

「もう食べたのかよ。」

「やさ男が退屈な話をしないから。」

「はいはい・・・」

新一はなれたように返した。

「食べ終わったら出てってね。」

目障りだから。」

「わぁってるよ。」

新一は弁当箱を片付けると屋上から出て行った。

「やーっと居なくなつた。

なんなんだよ、あいつ……。本当に猫みたいに居座りやがって・
・

ここはあたしの場所なんだかんやつ」

B u t t e r f l y 5 (後書き)

次回もよろしくです^^！

B u t t e r f l y 6

そつと中に入った。

中には誰もいない。ってわかっている。

「お邪魔します・・・」

大きな洋館。

何回も出入りしているのに、なんだかドキドキする。

それは、まぎれもなく・・・

もらった合鍵で入ったから。

目的もなく、ただ・・・入ったから。

「寂しくて、入ったなんて新一が知ったら・・・
嫌われちゃうかな。」

少し、心配する。

「新一・・・ちゃんと食べてるかな。」

「そこも心配。」

「でも、一番心配なのは・・・」

「他の人を好きになったりしてないかな。」

「自分には何も無いから・・・」

「蘭は心配していた。」

「勝手に向こうに行って調査が失敗したら嫌だし・・・」

「え？工藤君？」

「はい。警視庁に寄ったりとかしてますか？」

「ええ。工藤君の姿で来たりしてるけど・・・」

「今日も来ます？」

「ええ。まあ・・・」

美和子は目を丸くする。

「じゃあ、これ。渡してもらっていいですか？」

「お弁当？にしては大きいわね。
お重箱みたい。」

「はい。お重箱ですもん。」

「え！？」

「あいつのことだから、私の言いつけ破ってレトルトとかで済ませてると思うんです。
だから、少しでも栄養をつけないと。
解決できる事件も解決できませんから。」

「あら、ラブラブね！やっぱり。」

「からかわないでくださいよー！！」

「わかったわ。預かっておく。
でも、会わなくていいの？」

「はい。会つと、もっと一緒に居たくなりますから。」

「可愛いこと言って!！」

美和子は蘭の方をぽんぽんと軽くたたいて。

「まかせなさい!」と胸を張った。

(あれぐらいの量だったら、当分はもつよね・・・)

B u t t e r f l y 6 (後書き)

次回も宜しく願います!!

Butterfly 7

「あら、工藤君。」

「こんばんわ、佐藤刑事。」

「今日もご苦労様。」

そうそう、工藤君に渡さなきゃいけないものあるのよ。」

「え？何ですか。」

「これよ。」

ドーンと迫力のある大きな風呂敷に包まれたもの。

「何ですか？これ。」

「お重箱に入ったお弁当ですって。」

「弁当！？」

「2時間ほど前に蘭ちゃんが置いていったのよ。
きつと、自分の言いつけ破って
お惣菜とかで済ませてるだろうから・・・って。」

（あたってやがる・・・）

「この量なら、当分はもつだろうって言ってたわよ。
食べ終わったら、ここに持ってきてちょうだい。
私から渡しておくから。」

「・・・ありがとうございます。」

「それにしても、ごめんなさいね。
潜入調査を頼んだばかりに、蘭ちゃんと会えなくなっちゃって。」

「いえ、大丈夫ですよ。」

（大丈夫じゃねえけど・・・）

「そう？ならよかったわ。
じゃ、おやすみ。」

美和子は軽く手を振って別れを告げた。

「・・・ほんと、世話好きだよな・・・。」

ピロピロ

着信：新一

「あれ、新一から？」

「弁当、サンキューな！上手かった！！
明日から弁当に移して学校でも食うから。
あれだったら本当に当分もちそうだな。」

とりあえず、助かった！」

「やっぱり、お惣菜で済ませてたんだ。

・・・しょーがない。また作ってやらなきゃね。」

ケータイを片手に蘭は微笑んだ。

Butterfly 7 (後書き)

この時間だと・・・

こんばんわ、皆様・・・。

完璧風邪をひきました。

桜桃です。

つらいですね。

鼻声ですもん。お昼になると直ってくんですけどね・・・。(苦笑)

どんどん冬に近づいております・・・

風邪には皆様、くれぐれもお気をつけください・・・。

それでは、次回も宜しく願いします。

Butterfly 8

カチャ・・・

「お、やっぱり居たー。」

「当たり前でしょ。」

新一はアゲハに近づく。

「だからー・・・」

「半径1m以内だよな。
わかってるって。大丈夫。」

「そう・・・」

パカッ

「・・・なんかさー、最近・・・

あんたのお弁当かなりとグレードアップしてない？」

「え？」

「だって、卵焼き・・・すごく家庭的な感じがする。
前までお店って感じだったのに。」

（結構鋭いんだな・・・こいつ。）

「そうかー？」

「ま、私の知ったことじゃないけどね。」

「あ、そ・・・」

「じゃ、私も食べるか・・・」

アゲハもお弁当箱を開いた。

「ねえ、ずっと聞きたかったんだけどさ・・・」

「ん？」

「なんでそんなに私のことをかまうわけ？」

「・・・」

「ほつといてくれればいいのに。」

「一人で居るから・・・って同情してほしくもないしね。」

新一は軽く考える。

まさか、「お父さんの証拠を見つけるため。」などいえない。

「な、なんとなく・・・」

苦し紛れの言葉だった。

「なんとなく？」

「そ、そう！たまたま隣だったわけだし。」

「・・・」

怒るかと思い、身を守る覚悟でいた。

でも、次の瞬間聞こえてきた言葉は

「ふざけんな！」

とか

「何考えてんの？」

などの冷たい言葉ではなかった。

「クスクスッ」

笑い声。

「あははっおっかしい。

何がなんとなく。よ！もうちょっとマシな考え思いつけねえのかよ！」

「わ、悪かったな・・・」

「ま、いいけどー。」

「じゃあ、俺からも質問。」

「え？」

「何で、あいつらに心を開かないんだ？」

「・・・」

「それ、答えなきゃなんない？」

「できれば。」

「・・・別に、嫌いつてわけじゃないの。

でもさ、お金目当てだったり、顔とか体目当てだったり・・・みんな、上辺だけの私に近づいてくんの。」

「・・・」

「それが嫌なの・・・。

早乙女アゲハっていう、1人の人間として接してほしいのに・・・皆々、そういうやつなのかな、って思ったら・・・信用できなくて。

友達がほしいのに、できない・・・。」

「早乙女・・・」

「わかった？」

まあ、あんたは私をそう見てないみたいだからさ。」

「そっか。」

「それにしても、あんたは不思議ね。」

「え？」

「私を見て、好きになったりしないの？」

「何で？」

「何でって・・・これでも一応、美少女って言われてますから。モデルと区別がつかないほどのプロポーション。見た目は最高の女だって言われてるの。」

「へえ。」

新一は興味なさそうに答える。

「へえってねえ・・・」

「俺、見た目なんてしらねえもん。」

「え？」

「ようは中身。だろ？」

「そうだけど・・・」

「見た目なんて、別にどうってことねえよ。
顔はいくつでも変えられるけど、中身はそう簡単に変えられない。
俺はそう思ってるからさ。」

「じゃあ・・・顔がものすごいブスで、頭も運動も悪くて・・・
料理も下手で、でもすごく優しくかったら・・・それだけで好きに
なるの？」

「うーん・・・俺、好きなタイプに優しいやつって入ってねえし・・・」

「え？そうなの？
だったら、どういのが中身良しなのよ!」

アゲハは意味がわからない!とイライラしたような口ぶりで言う。

（中身良しっていつか・・・）

俺の好きなタイプ、毛利蘭・・・だし。」

「さあな・・・俺、好きになったやつがタイプだし。

俺が好きになったやつが性格良し。なんじゃねえの?」

「ふうん。」

アゲハは頭に?マークを浮かべながらご飯を食べた。

B u t t e r f l y 8 (後書き)

アゲハちゃん、新一が好きなんですかね・・・？
私にもわかりません。

(　　おいおい、そんなでいいのか・・・？　　)

Butterfly 9

新一が朝、教室へと向かおうとすると・・・

やけに、騒がしかった。

「喧嘩だー！喧嘩だぞー！」

「おい、誰が喧嘩してるって？」

「あ、藤峰！！早乙女だぜ、早乙女ー！」

「はあ！？」

「先輩と早乙女がやりあったみてーだぜ。」

（何やってんだよ、アイツ・・・）と新一は心の中でため息をつく。

ガッタン！

ガッシャーン

激しい音がする。

新一はひょいっと群がる廊下を除いた。

5 対 1。

言うまでもなく、アゲハが1人。

「あ、藤峰くん、おはよう。」

「はよ・・・それより、どうしたんだ？」

「アゲハが先輩にあそこで呼び出しくらってさあ。
アンタの顔、むかつくんだよ。って言ったんだよね。」

（なんだ、それ・・・）

「で、アゲハが・・・
そう？あたしはアンタみたいな顔にならなくてよかったけど。
って言ったわけ。」

「へえ・・・」

「そしたら、尽かさず先輩がいろいろ言うわけね・・・
で、しまいにはアゲハがめんどくさくなってきたのか
うつせえんだよブス！って言ったの。
したら先輩たち何もいえなくなっでさ。
で、この状況。」

（すげえ状況・・・）

「私、全部見ててさ。」

止めたほうが良いってわかってるんだけど、怖くて。」

「まあ、たいていの奴はそうだろうな・・・。」

く屋上く

「い・・・つてえっ！

本気で殴りやがってアイツら！！退学にしてやる！」

「いや、本当にいたそうだな。」

「・・・見物？」

「まあ・・・そうなるかもな。」

「まったく、見てたんなら助けてくれたっていいんじゃないの？」

「お前の場合、貸しは嫌だろ？」

「・・・ま、そうだけど・・・。」

顔にまた一つ、アゲハは絆創膏をつけた。

「退学にする。絶対退学にする！！」

「まあ、落ち着けよ・・・皆お前がうらやましいんだからさ・・・
お前も相手にしなきゃいいのに・・・。」

「しゃーないでしょ？」

あつたいがバンバン言ってくるんだもん。
だから、黙らせようと思って。」

「だからブスって言っていていいわけじゃねえだろ？」

「そうだけど・・・」

って、ほつといてよ！！あたしはあたしの好きなようにするんだから！

アンタが知ったことじゃないでしょ！？」

「そうだけど・・・なんとなく、ほつとけねえんだよな・・・。」

（なんか、蘭と灰原をくつつけたみたいな性格だし・・・）

「え・・・？」

「ま、そういうわけだから・・・

あ・・・それと、一応それ保健室行ったほうがいいと思うぜ？
ちゃんと消毒できるだろうしさ。んじゃあな。」

新一は屋上から出て行った。

「・・・なんなんだよ、アイツ・・・。やさ男のくせに・・・。」

B u t t e r f l y 9 (後書き)

お、お、お？

アゲハちゃん、まさか・・・！？

なわけないか。

1人でのギャグ？はスルーしてください・・・。

それでは、次回も宜しくお願いします！！

「あんた、早乙女アゲハ？」

「だつたら何？」

「ちょっと顔貸してくんない？」

「なんで貸さなきゃいけないわけ？」

「話があるんだつたら、ここで言えば？」

「それとも・・・皆に聞かれたらまずいこと？」

アゲハの言葉に黙る女子・・・3人組。

「・・・ま、しょうがない。

顔でもなんでも貸してやるーじゃないの。

で、どこで話す？」

「・・・付いてきて。」

*****裏庭*****

「単刀直入に言わせてもらっよ。
アンタ、最近調子に乗ってるよね。」

「調子に乗ってる?」

「とぼけたって無駄よ。
私たちが知ってるんだから。屋上で2人仲良くお弁当食べてるところ!」

「はあ?」

「藤峰君と食べてるじゃない!!」

この言葉にアゲハは目を点にした。

「え？それで・・・？」

「それだけよー!!」

「・・・はあ？それだけであたしを呼び出したわけ？勘弁してよー。」

アゲハはハア。とため息をついた。

「アンタ、藤峰君のなんなの!？」

「んー・・・付き合ってる。って言われたい？」

「なっ・・・」

「アンタら、あの男が好きなわけー？」

アゲハの言葉に3人は顔を真っ赤にさせた。

「あの男が好きなら3人が集まってるんだ。」

「ち、違うわー!!」

「んじゃあ、あんたたちに言う義理ないよね？」

「うつ・・・」

「・・・ま、安心しな。

あたしとあいつはそんなんじゃないから。」

「う、うそよ!!」

「・・・はあ？嘘じゃないわよ!!」

「だったら、なんでお弁当と一緒に食べてるのよ。」

「・・・ハア。あんたたち、私とあの男が付き合ってるって決め付けたいわけ？

私が違うって言ってんだから、違うの!!

私が信用ならんなら、あいつに聞きなさいよ!!」

「・・・」

「いーい？自慢じゃないけど、あいつにとって私は女と見られてないの!!」

こんな美少女を目にして、不思議でたまらないわ。」

「・・・信用していいのね？」

「別に無理して信用しなくたっていいわよ。」

つーんとアゲハはそっぽを向く。

「つ、付き合ってたら、一生うらむからねー!!」

「覚えてなさいよー!!」

「信用したんだからねー!!」

大声で叫びながら3人は走っていった。

「・・・だーから、別に無理しなくていいんだって・・・」

アゲハがそうつぶやいたとき、ガサガサッと草が動いた。

「!？」

「いやー、お前っていつつもそうだけど、正当なこと言ったよな。」

「・・・アンタ、そこに居たんだったら助けてくれてもいいんじゃないの？」

モテモテのやさ男!!」

そう、草むらには新一が居た。

「俺が助けたら余計立場が悪くなるだろ？」

「・・・別に、立場が悪いのはいつもことよ。」

「だから、これ以上悪くしてどうするんだよ、ってこと!」

「アンタには関係ないでしょ。」

「ったく、可愛くねえな・・・」

どっかの誰かみたいだ・・・と新一はつぶやく。

「・・・っ！余計なお世話・・・だよ!!」

近くにあったボールを新一に投げる。

しかし、新一はそれを余裕で交わした。

「・・・俺、これでも反射神経はいいほうだから。」

「あっそ・・・。」

Butterfly 10 (後書き)

こんばんわ！

桜桃です。

これを予約したのは・・・金曜日だから・・・

感想の返信は明日になりますね！！

遅れて申し訳ありません・・・。

しかし、ちゃんと返しますので！

く屋上へ

「ねえ。」

「ん？」

「あんたと私って恋人同士に見える？」

「ブツ」

新一は飲んでいた珈琲を噴出した。

「きたねえな。ちゃんと拭けよ？」

「わあってるよ。」

「・・・そうだ。本当につきあっちゃまうか。」

「はあ？」

「そしたら、誰も文句言わないでしょ？」

「すげえ思考回路。」

「すごい名案だと思うけど。」

「俺、ここで彼女をつくる気ねえから。」

「はあ？いいじゃん、フリだよ、フリ！！」

「だから余計に性質が悪い。」

「なにそれー。」

アゲハは唇を尖らせた。

「ねえ。」

本日二度目の「ねえ。」

「ん？」

そして、本日二度目の「ん？」

「あんたの名前、何だっけ。」

「はあ！？それくらい覚えとけよ！」

「悪かったわね！やさ男って呼んでたら本当の名前忘れちゃったのよ！」

文句ある？」

「ねえけど・・・」

「んで、名前は？」

「くど・・・じゃなくて藤峰新。」

「しん？あらたじゃなくて？」

「しん。」

「へえ・・・」

「んだよ、珍しくねえだろ？」

「そうだけど・・・んじゃ、よろしくね。藤峰。」

（・・・いいよな、呼び捨てじゃねえし・・・）

「よろしくな。早乙女。」

「私、アンタを友達だと思っていいいの？」

「どうぞ、ご自由に。」

「そっか。やっと心を開ける友達ができたか。」

太陽のように微笑むアゲハの顔を初めて見る。

「・・・お前、いつもそうしてるよ。」

そしてら、誤解も解けるぜ。きっと・・・」

「面白くないのに笑いたくないね。」

あんなふうにキャピキャピしたくない。」

「ハッハーン。」

「何よ!」

「お前、うらやましいんだろ。」

「はあ!??なんであたしが。あんなキャピキャピしたのに羨ましがらなきゃ

いけねえんだよ!バツカみたい。」

「ああ、そう。」

でもよー・・・少し、心を開いてみたらどうだよ。」

「やだよ・・・」

「何で。」

「アンタ、あたしがされてきたこと知らないから

そんなこと言えんだ・・・あんな出来事さえなければ

こんなにひどくなることはなかった・・・

人を信用してなくても、問題児になるぐらいまでいかなかった・・・

」

「んだよ、あんな出来事って・・・」

「言いたくない。」

「あのなあ、言わなかったら俺だって理解のしようがねえだろ。」

「・・・嫌いにならない？」

涙を流すアゲハの姿をまたもや、初めての出来事。

いつもこんなに可愛くしてりゃあいいのに・・・

と新一はつぶやいた。

「ならねえよ。」

「・・・あたしが中2のとき・・・図書室に呼ばれたんだよね。」

〓 〓 〓 〓 〓 〓 〓

「アゲハ、可愛いから。」

行っただいよ。その先輩、結構人気なんだよ?」

「でも・・・告白の返事に困る・・・。」

「そんなの、OKしちゃいなよ!本当に良い人なんだからさ。」

「・・・良子・・・。」

良子っていうのは、あたしの親友だった。

成績はトップで明るくて、人気者。

容姿しか取り柄のないあたしに初めて声をかけてくれた

親友だったの。

「図書室でしょ?」

「うん・・・」

「早く行っておいで。」

「わかった・・・。」

図書室

「せ、先輩・・・？」

薄暗い図書室をあたしはおそるおそる・・・

声を出してみたの。

でも、次の瞬間腕が強くひっぱられていった。

「だれっ!？」

「うわ、本当に来た。」

「へえ、噂どおり、結構可愛いじゃん？」

「誰なのよ!」

「俺たち、お前が最近調子に乗ってるから痛めつけてほしいって依頼されたんだよねえ。ある子から。」

「誰よ、それ。」

「んゝ、それはいえねえよ。」

どんどん近づいてくる無数の手。

あたしはもう無我夢中で・・・近くにあったはさみを振り回したの。

何人かはかすり傷・・・。

それでもあたしは振り回し続けて・・・

逃げた。

「り、良子お。」

あたしは良子を見つけて、必死にしがみついたわ。

でも、良子はそんなあたしの腕を振り解いた。

「失敗したの？あいつら、根性なしね。」

「え・・・？」

「あいつらに依頼したの、私よ。」

「どうして・・・」

「どうして？アンタ、私の気持ちを考えたこと、ある！？」

私が好きになった男の子は皆アンタを好きになる。

私は勉強もたくさんしたし、内面をたくさん磨いた。

それでも好きになるのはみんな、可愛い子！あんた！！

そんなアンタの隣に居る私がどれだけ惨めだったか・・・」

「良子・・・」

「触らないで！！」

もう、限界なの・・・嫌なの。あんたのその顔が・・・
会ったときから、大ッ嫌いだった。」

「り・・・よう・・・こ」

泣き崩れるあたしを良子はあざ笑うかのように

見下してた。

「フツねえ、何で私があんたに話しかけたか、わかる？」

「え？」

「めちゃくちゃにしてやるうつて思ったからよ。

あんたの顔見た瞬間・・・

私にないものを持っているアンタをめちゃくちゃにして・・・

私は優位に立ちたかったの。

そう・・・私はストレスを・・・私のコンプレックスを発散するために

話しかけたの。わかった？」

|| || || || || || || || || || ||

「これが、私の人を信用できなくなった理由。」

「・・・そっか。」

「何も言わねえんだ。」

「正直、今の俺には何もいえない。
ただ・・・あいつらがその良子って奴と同じとは限らねえんじゃないの？」

「・・・わかってるわよ。」

「少し、ほんの少し、話しかけてみるよ。」

「・・・」

アゲハは黙った。

B u t t e r f l y 1 1 (後書き)

アゲハちゃんの以外な過去!?

〈教室〉

ガラッ

「お、おはよう・・・アゲハ。」

「おはよう。早乙女さん。」

「早乙女さん、おはよう。」

いきなり話しかけてきたクラスメイトに

アゲハは心底驚いた。

今まで、自分を無視することはあっても

話しかけてはこなかった。

仮に、話しかけてきたとしても

面白半分にしかすぎないのだ。

『少し、ほんの少し、話しかけてみるよ。』

新一の言葉が頭を過ぎった。

「お、おは・・・おはよ。」

アゲハが言葉を発すると、クラス一同は
瞳を輝かせた。

「おはよう!」

「よかった。」

早乙女さん、怖いイメージしかなかったから・・・
話しかけられてよかった！」

「ずっと友達になりたかったんだ。
でも、早乙女さん・・・きつと友達要らないだろうな・・・
って思ってたの。」

「でも、藤峰くんとは一緒にいるでしょ？
うらやましくて。」

「羨ましいなんて・・・」

「藤峰くんに言ったんだよ。
どうしたら早乙女さんと仲良くなれるかな。って・・・
したら、思い切って話しかけてみる。って言われてさ・・・」

「そうそう！
やっぱり話しかけてよかったなあ。」

アゲハは新一の姿を探した。

「あれ、藤峰は？」

「ああ、彼ならまだだけど？」

「ねえ、それよりさ、私たち皆・・・

早乙女さんと友達だって、思っ*て*いいんだよね？」

「え？あ・・・うん。」

アゲハがそう言つと、

一同は嬉しそうにハイタッチした。

「やったあ！」

B u t t e r f l y 1 2 (後書き)

ずいぶん更新が遅れてしまいました・・・。
すみません。

「つたく、余計な事して!!」

「はあ？」

「あたしに友達できるよう、裏で手を回してたなんてね！」

「あんなあ、人聞きのわりいこと言うなよ！」

「だって、そうでしょ？」

「だけど・・・」

「ま、嬉しかったから許してあげるわ。」

「へ？」

意外な言葉に新一は目を丸くした。

「だーから、ありがとうって言ってるのよ!!
耳悪いのね!」

「・・・」

「なによ・・・どーせあたしらしくない。

とても思ってるんでしょ? いーわよ、思いたきゃ思いなさいよね
!!

フンッ」

「ああ。思ってる。」

「即答!?!」

アゲハは「信じられない・・・」と呟いた。

「お前さ・・・そうやってっ素直になれよ。
そっちのほうが可愛げがあるってもんだろ?」

「なに・・・それ。」

「ま、弁当くおーぜ。」

何事もなかったように弁当を食べる新一に

アゲハは呆れたようにため息をついた。

「・・・なあ、早乙女。」

「なに？」

「お前さ・・・ストレートにしねえのか？」

「何を。」

「髪。」

「嫌。あたし、この髪型気に入ってるの。」

「ふうん・・・」

でもよー、パーマよりストレートのほうが
似合ってるぜ、きっと。」

ドッキュンッ

少女マンガの効果音みたいなのが

アゲハの脳裏に鳴った。

カーーッと

アゲハの顔がみるみる赤くなっていく。

「おい、大丈夫か？熱あんじゃないの？」

「べ、べつになんでもないわよ！」

「んなこと言ってたって、顔が・・・」

「顔？あたしはもとからこんな顔よ！気にしないで！！」

「・・・どうした？お前。」

「どうした？こーしたあ？」

「お、おま・・・大丈夫かよ、本当に？」

「大丈夫、大丈夫！絶好調よ！
もう、校長先生絶好調！並よ！！」

シーン・・・

「お前、キャラが・・・
本当に病院行った方がいいんじゃないの？」

（あたし、今なんて言った・・・？）

アゲハには新一の言葉など聞こえてない。

（校長先生絶好調・・・

あ、あたしはなにを言ってるの・・・！？
このあたしが・・・

あいつが動揺させるからよお！）

「・・・ごめん、おかしくなった。」

「・・・戻ったか？」

「ええ。まあ。」

お見苦しいところ、見せて悪かったわね。」

「ほ、本当に戻った・・・」

「なによ、信じられない？」

「いや、そうじゃねえよ。」

新一は心底ホッとしたように胸をなでおろした。

「ちょ、あんたそこまでホッとすること
ないでしょー!？」

屋上にアゲハの声が木霊した。

B u t t e r f l y 1 3 (後書き)

では……次回

「はよー。」

「アゲハちゃん！おは・・・」

「ど、どーしたの？」

アゲハを観るなり一同は目を丸くした。

それもそのはず。

一気にストレートにしたのだから。

「ん・・・ちょっとイメチェン。」

「イメチェンって・・・変わりすぎー!!」

「ほーんとー!!」

大爆笑。

「へえ。ストレートにしたんだ。」

「べ、べつつに！
アンタに言われたからじゃないわよ！！」

「はいはい。」

「す、ストレートもいいかな、って
思っただけなんだから！」

「わあっってるって！
似合ってる。」

どきんっ

「あ、あ、あ、あ、あ、あ……りがと。」

アゲハの挙動不審な態度に新一は目を丸くさせた。

「ま、とりあえず・・・お、お弁当だよ。
うん、食べよう！」

「・・・本当に大丈夫か？」

「だ、大丈夫！」

「お、おい、そんなに一気に食べたら
喉詰まらせるぞ。」

「ぐつみ、水・・・！」

新一はペットボトルをアゲハに手渡す。

「ありがと・・・助かった。」

「ったく、言っただけから・・・」

「悪かったわね。」

「あ……そーだ、この間お前に貸した本があつたろ。」

「うん。」

「あれさ、父さんのなんだけど、
今日中に渡さなきゃなんねえんだよ。」

「え？そうなの？私、持ってきてない。」

「だよなー……どうしよ……。」

これは作戦のうちだった。

「あ、なんなら、今日の帰り、あたしん家おいでよ。
すぐ持ってくるからさ。」

「マジ？」

これを狙っていた。

「助かる！」

「ごめん。あたしがずっと貸してもらってたからね。」

「いや、俺も突然で悪かった。」

「こうして、ちやくちやくと進められていく。」

蘭と会わないまま、もうすぐ3週間が経とうとしていた。

B u t t e r f l y 1 4 (後書き)

次回もよろしくです!!

カチャッ

「ただいまー。」

「お嬢様、お帰りなさいませ。
・・・あら、そちらは？」

「どうだっていいでしょ。とりあえずお茶をお出しして。」

「あ・・・はい、かしこまりました。」

メイド服を着た女性は慌てて走る。

アゲハの家は新一と同じような洋館だった。

下には赤いじゅうたんが敷かれてある。

「でかい家だな。」

「そう？まあ、全てオヤジの金だけだね。」

新一は心の中で（麻薬で稼いだ金だな・・・）とつぶやいた。

「おめーの父さん、何やってんだ？」

「さあ、知らない。興味ないし。」

あつ上着はその辺においておいて。」

アゲハが指をさす方向に新一は上着を置く。

「じゃ、付いてきて。」

「ああ。」

アゲハに黙ってついていくと

白い扉の前まで案内された。

「ここ、あたしの部屋。」

「へえ。」

「入る？」

「いや、いい。」

「何だよ。」

「取って食われそうだ。」

「ちよっ人を何だと思ってんのよ!!」

「冗談だよ、冗談。」

アゲハは「冗談に聞こえないのよ・・・」とぶつくさ言いながら部屋に1人で入っていく。

カチャッ

「はい、これでいいのよね。」

「ああ。サンキュー。」

「まあ、また今度違うの貸してよ。」

「ああ、わりいな。」

「何でもいいからさ。」

2人で話しながら会談を降りていくと

下で話し声が聞こえてきた。

「え？アゲハに彼氏？」

「ええ、さっきもお部屋に2人で・・・
いいんですか？旦那様。」

「ああ。好きにしてやれ。」

アゲハくらいの年頃は好きにさせるのが一番だ。」

「そうは言っても・・・」

あっお嬢様・・・お連れの方、もうお帰りですか？」

おどおどした口調にアゲハはつい、舌打ちをする。

「はぁ・・・また告げ口。」

「またって何だよ。」

「前もあつたのよ。タバコ吸ってたら見つかってさ・・・
んで、オヤジにバラされた。」

あのメイド、若いくせにオヤジを好きみたいでさ
でもあたしとは折り合いが悪くて・・・

んで、オヤジとあたしに仲たがいさせて自分がその間に割り込む・

・

ま、そんなところね。」

「へえ・・・」

新一はアゲハの洞察力について関心してしまう。

「お前、警察関係の仕事とか向いてると思うぜ？」

「なに、それ・・・。」

「おい、そこで何話してるんだ。
こっちに降りてきなさい。」

「はい。」

「ってことで、ひとまず下に行こっつ？」

「そうだな。」

下まで降りるとアゲハの父はにこやかな笑みを

新一に向けてきた。

「初めまして。アゲハさんと同じクラスの藤峰新といいます。」

「ああ、よろしく。」

「あ、君・・・コックに頼んで特上のフルコースを頼むと言ってくれ。」

「わかりました。」

「ちょっと、パパ。」

「彼はもう帰るのよ？長居させたら困るわ。」

「おお、そうか。」

「いえ、大丈夫ですよ。」

「え？」

「新一はアゲハに大丈夫だ。と口パクした。」

「大丈夫なんだったら・・・」

「じゃあ、パパ。」

最高のおもてなしをしなきゃね。」

「ああ、そうだな。」

じゃあ私は着替えてくる。先に座っててくれ。」

「はい、パパ。」

アゲハの父の背中が見えなくなるまで見つめた。

「・・・おい。」

「なに？」

「口調がえらく違うみてーだけど・・・」

「ああ・・・しょうがないでしょ。」

ちゃんとしないと、いろいろ面倒だし。」

「へえ。」

「ちなみに、タバコときは社会勉強だと言って

泣いといたらスルツと許してくれたの。」

「すんげー度胸。」

「親をだますなんてこれくらいどうつてことないのよ。」

アゲハはしらっとして言った。

B u t t e r f l y 1 5 (後書き)

次回は楽しい

お夕食・・・？

カチャ

カチャ

静かに食器の音だけが聞こえる。

「アゲハ、食器で音を立てちゃいかん。」

「・・・すみません、パパ。」

「ところで・・・藤、峰くんだったかい？」

「はい。」

「アゲハとはお付き合いしてるのかね？」

ブーッ

アゲハは飲んでいた飲み物を噴出してしまった。

「お、お嬢様・・・」

「ごめんなさい、フキンをお願いします。」

「はい、どうぞ。」

「ありがとうございます。」

「アゲハ、どうした。」

「すみません。」

あまりにも唐突の言葉だったから・・・
パパ、彼と私はただのお友達よ。」

「ただの友達を家に呼ぶのか？」

「呼んだんじゃないわ。」

本を返しただけよ。ただそれだけ。」

「ほお・・・」

アゲハの父はワイングラスを片手にとる。

「じゃあ・・・お互いにその感情は？」

「ないわよ。」

「僕もないです。」

心底残念そうに顔を暗くする。

「君ならアゲハを任せられると思ったんだけどな・・・」

「勝手に決めないでよ。」

「私は好きな人くらい自分で決めますから。」

「そうか・・・」

「・・・ところで、失礼ですがお聞きしていいですか？」

「なんだい？」

「職業は何を？」

新一の言葉に一瞬、手が止まった。

しかし、笑顔をつくる。

「・・・経営だよ。」

「へえ・・・僕、将来は自分の会社を設立させようと思ってるんです。」

「ほお、それは壮大な夢だね。」

「はい。だから今のうちにいろいろと社会勉強を。差し支えがなかったら、お仕事の内容など・・・教えてもらいたいんですが。」

新一はとことん追い込んだ。

内心、とても焦っている。

3週間、蘭に会っていない。

そろそろ限界だった。

「そうだな・・・君くらいなら教えてもいいだろう。」

「え？」

意外な言葉に新一は目を丸くさせた。

「いろいろチェーン店を出しているんだ。」

「名前は？」

「Stone Hillっていう店だよ。」

「Stone Hillっていったら、今女子高生に話題のチェーン店じゃない。」

あっちこっちにあって便利だって有名な・・・。」

「ああ、全て高校の近くにして若い子に気をひくっていう作戦なんだ。」

「・・・パパが経営してたんだ。知らなかった。」

「はははっ」

「・・・」

「ご馳走様でした。」

「また、いつでも来るといい。」

「じゃあ、またね。藤峰。」

「これ、アゲハ。呼び捨てにするな。」

「・・・藤峰くん、またね。」

「ああ、またな。それじゃ、失礼しました!」

新一は最後の最後まで笑顔を振りまいた。

B u t t e r f l y 1 6 (後書き)

さてさて・・・どうなるか!?

新一は現状報告のため警視庁に来ていた。

「え？確定？」

「はい。早乙女アゲハの父は麻薬密売人
ほぼ確定です。」

あまりにも証拠がないため、

警察ももしかしたら違うのではないかと諦めかけていた。

「でも、その根拠はなんなの？工藤君。」

「Stone Hillです。」

「Stone Hill?」

「そのチェーン店、知ってますか?」

「あ、僕知ってます。中高生をターゲットにした店ですよ。」

「ああ・・・そんな店、あったのね。」

「まあ、佐藤さんは中高生とはほど遠・・・」

「なによ、高木くん。私が年増とでも言いたいのか?」

「い、いえ・・・そうじゃなくて・・・」

「あれ?その店の名前・・・Stone Hillって聞いたことがあるわね・・・。」

「聞いたことあって当然ですよ。」

新一は意味ありげに笑う。

「Stone Hillは石坂組が経営してる店なんですから。」

「え？」

「Stone Hillは石と坂を英語にしたもの……だから僕もすぐにピンとききました。」

「なるほどね。」

「でも、きっと彼は下の下ですね。」

「え？」

「麻薬を受け取って売買するだけの下っ端ですよ。いわゆる……関係者。になりますね。」

新一は淡々としゃべる。

「それより、ずっと聞きたかったんですけど……」

「何だね？」

「麻薬って1課の仕事じゃないですよ。なんで警部たちが調べてるんですか？」

「……麻薬だけじゃないのよ。」

静かに口を開く。

「え？」

「殺人の容疑も掛かってるの。

だからね、工藤君・・・その証拠も掴んでほしいんだけど。」

「お願い・・・できるかな？」

佐藤刑事と高木刑事は手を合わせた。

「・・・わかりました。」

（蘭と会う日が遠ざかっていくのは気のせいか・・・？）

新一は心の中で小さくつぶやいた。

B u t t e r f l y 1 7 (後 書 き)

捕まるのでしょうか？

アゲハ父・・・。

B u t t e r f l y 1 8 (前書き)

蘭視点です!!

そろそろ・・・食べ終わっただろうか。

約1週間前にお弁当を渡したきり。

一応長持ちするようなおかずにしたけど・・・

新一と会わなくなつて3週間。

いい加減、そろそろ会いたい。

前は少しだけ、ほんの少しだけ・・・平気だった。

あの時は傍にいただけで良い。

なんて思ってたのに

思いが通じたら

毎日会いたい。なんて思ってしまう。

欲張りだよね。

ピンポン

「はい。」

「蘭ちゃん？私だけど。」

「佐藤刑事？」

あ、ちょっと待っててください。今開けます。」

カチャ

「元気にしてた？」

「はい。なんとか・・・」

「その顔は工藤君に会えなくて寂しがってたわね。」

「もう、からかわないください。」

私の反応をあきらかに楽しんでいた。

「まあ、それはそうと・・・昨日工藤君がきたから貰ったのはい、どうぞ」

「あ・・・お弁当。」

「ちゃんと綺麗に食べたみたいね。
蘭ちゃんに貰ったときより随分軽くなってるわ。」

「・・・よかった。」

「工藤君が蘭ちゃんの手料理を残すはずないと思うけど。」

「佐藤刑事・・・」

私が軽く睨むと佐藤刑事は乾いた笑みを残す。

「じゃ、これを渡しに来たようなもんだから。
そろそろ行かないと・・・」

「あ・・・頑張ってくださいね。」

「ありがとう。その言葉、工藤君にも行ってあげて。」

「はい！」

・・・いいなあ。

帰っていく佐藤刑事の後姿を見て私は思う。

佐藤刑事は新一に会えるんだもんね。

・・・お仕事だから仕方ないけど。

いいな・・・

私も、会いたいのに・・・。

すごく遠い・・・。

待ってて。って・・・

また言われちゃった。

待っててくれ。って言葉に私すごく敏感になったかもしれない。

トラウマ・・・なのかな。

バカね、新一はもう何処にも行かないのに・・・

可愛い女の子に言い寄られてないかな。

他の子、好きになってない？

答えてくれないのに、私は心の中で質問を繰り返す。

私のこと、忘れちゃってるかな？

考えててもしょうがないよね。

・・・お弁当、作ろう。

B u t t e r f l y 1 8 (後書き)

新一が好きでしょうがない蘭。

を書いてみました。

「そついやさ・・・藤峰。」

「？」

「あたし、なんか監視されてるように思っただよね。」

ギグッ

新一は背筋をぴーんと伸ばした。

それもその筈。

新一はトイレに行くと言っていたるところにバレぬよう

監視カメラをつけたのだから。

「気のせいじゃねえか？」

「そうかなあ。」

「そうそう。」

「なら、いいんだけどさ。」

アゲハはそれだけ言つと弁当箱を開いた。

「・・・それより、ごめんね。」

「え？」

「オヤジのこと。」

あんな風に和気藹々とされちゃったから困るよね。」

「ああ・・・別にそうでもねえよ。」

「そう言ってくれたらいいんだけど・・・
オヤジ、ああいうかんじだからさ。
ほんと、クソオヤジ。」

父親のことを散々に言ってるが、アゲハは楽しそうだった。

その姿に新一の心も痛む。

彼女の父親は麻薬どころか、殺人の容疑までかかっているのだから。

「ま、あんなクソオヤジでも、私のたった一人の父親なんだけども、どうしようもないクソオヤジだけだね。」

「そうだな・・・」

「そーいや、あのメイド最近よそそしんだよね、オヤジとなんかあったのかな・・・ま、どーでもいいけどお。」

ふああと大きな欠伸をしてアゲハは横たわった。

「ねえ、頭痛い。」

膝枕してよ……。」

「……そーいうのは好きな男にしてもらえ。」

「えー……。」

「俺も好きな女にしかやらねえから。」

「……私は好きな女に入らないの？」

時が一瞬止まる。

「……友達として、好きかって聞いてるの。」

「ああ・・・なんだそうか。」

「当たり前でしょ？」

アゲハもどきまぎしながら冷静を装う。

なんであんなこと言ってしまったんだろうと今更後悔。

「お前は好きだよ。結構さばさばしてるし。
でもさ・・・恋とか愛じゃねえだろ？」

ズキンッ

アゲハの心に重くのしかかる。

「そうだけど・・・」

「ま、本当に好きなやつができたときまで
楽しみにしとけよな。」

「・・・へいへい。」

Butterfly 19 (後書き)

感想 & 評価

お待ちしております

B u t t e r f l y 2 0 (前書き)

新一視点です。

殺人の証拠も見つけなきゃなんねーし・・・

本当に一ヶ月で終わるかどうかな不安だな、こりゃ。

まあ、凶器が見つかってないってことは・・・

どこかに隠してるってことだよな。

家・・・か。

そっちの線のほうが濃いよな。

どう考えたって。

しかし、凶器をいまだ持ってるってことほど

リスクの高いことをするか？普通。

よほど隠し場所に自信があるのか・・・。

「・・・・・・・・ね。」

でも、どこか遠くに捨てるより

安心はするよな、自分の近くにあったほうが・・・。

「藤峰！」

「うわっ・・・・・・・・なんだよ、早乙女か。」

「悪かったわね、あたしで。

色気ムンムンのセクシー美女のほうが良かった？」

「バカ言ってるじゃねえよ。

考え事してたんだ、考え事。」

「考え事お？」

早乙女は怪訝そうに言う。

「あ・・・そうだ。お前の父さん、この日・・・何処に行ってたか覚えてるか？」

俺は日付の書いたところを指差す。

これは、殺害日。

「さあ？知らない。」

「・・・やっぱ、そうだよな、結構まえだし。」

「そうだよ。」

人生そんなうまくできてねえよな。

俺は乾いた笑みをもらす。

「・・・あ。そういや・・・」

「なんか思い出したか!？」

「んー・・・確かさ、オヤジ・・・
べっっちゃべちやになって帰ってきたんだよね・・・
多分その日だと思う。」

「べちやべちや?」

「うん。」

「まあ、雨が降ってたから別にどうってことないんだけ・・・ど・・・
って藤峰?聞いてるー?」

早乙女の声はすでに俺の頭には入ってこなかった。

ひたすら警部達の言葉を思い出す。

『被害者が殺された場所の近くで血が広範囲で広がっていたんだよ。』

『広範囲？』

『ええ、そりゃあもうバーツとね。』

『絵の具を飛び散らしたんじゃないかって思ったくらいだったよ。』

『そんなに広がったんですか？』

『広がったつてのもあるんだけど、水に混ぜた感じだったのよ。で、血だから茶色になつてるでしょ？

スケッチした人が絵の具を含ませた水を間違つてこぼしてしまつたんじゃないかって

思つたんだけど・・・』

『あまりにも広範囲だったんで、鑑識に調べてもらったところ・・・被害者と血液が一致。』

『なるほど・・・』

『でも、あれよね、いくら雨が降つてたからつて大量に返り血を浴びた犯人を誰も目撃してないつてところが不思議よね。』

『ほんとですよね。』

『大量だったんですか？』

『ええ、相当な返り血だったと思うわよ？
かなり残酷なきり方をされてたから・・・。』

雨・・・返り血・・・

目撃者は誰もいない・・・

べちゃべちゃに濡れていた・・・

水の含まれた血のあと・・・

「藤峰？」

「・・・っ早乙女!!」

「は、はい!・・・?」

「この日のお前の父さんの服装・・・なんだったか覚えてるか!?」

「え?確か・・・合羽だと思うけど・・・」

「合羽だな?わかった!」

「なによ、イキナリ。」

「悪い、早乙女!

先生には具合悪いから早退したって言ってくれ!」

「・・・具合悪そうに見えないんだけど・・・。」

B u t t e r f l y 2 0 (後書き)

新くんはどこへ向かったのでしょうか？

「ハア、ハアッ」

新一はずっと走っていたため、息が荒い。

目の前は警視庁だ。

「警部！！」

「おお、工藤君。どうしたんだね、まだキミは学校のハズじゃ・・・」

「早引きさせてもらいました。」

それより、わかったんですよ、犯行の手口が！」

「え？それ、本当なの？工藤君。」

目を丸くさせる美和子に新一は深く頷いた。

「佐藤刑事、言っていましたよね。」

事件後の犯人を目撃する証言があげられてない。って……だから、どんな格好してたかもわからない。

ただ、早乙女の父親が関係してたことはわかってる。と……」

「ええ。」

「そして、現場現状と早乙女の手紙でピーンときたんですよ。」

早乙女の父親が犯行当時、どんな服装だったのか。

どうして犯行後、返り血を浴びたはずの犯人を目撃する声がないのか……

ということだね……。」

犯行現場は人気の少ない公園だった。

しかし、公園は町の真ん中にあり、公園を出てしまえばかなりの人

数がいる。

目撃されて当然だった。

「く、工藤君！それは・・・」

「まず、犯人は人気の少ない公園に呼び出したんです。そして、殺害・・・ここまでは皆さんもおわかりのことですよ。」

「ええ。私たちはそれから公園のトイレに凶器と返り血を浴びた服を置いたんじゃないかと探したけどなかった。」

「服はもしかしたらトイレに切り刻んで捨てたかもしれないと思って調べたけどなにもなしだったよ。」

「公園のどこかに埋めたかもしれんとかいろいろ考えたが・・・なにも出てこなかったよ。
近くの噴水で体を洗った形跡もなかったし・・・」

「・・・そうです。それこそが犯人の思惑だったんですよ。」
「え？」

「犯人は雨の日じゃなければなかった理由があります。」

「もしかして・・・犯人は雨で返り血を洗い流したの!？」

「しかし、それにはかなりの時間がかかる……」

「雨で大量の返り血を流しきるには警部の言うとおり時間がかかります。」

それじゃ犯人の用意したアリバイが崩れてしまう。」

アリバイ……というのは

早乙女の父……は会社仲間とのみに行っていた。

抜け出したのはほんの五分程度……。

というものだった。

「じゃあ、犯人はどうやって返り血を洗い流したの？」

「噴水、ですよ。」

「え!？」

「でもね、工藤君。

噴水には返り血を洗い流した形跡は見当たらなかったんだよ。」

「そりゃそうですよ、高木刑事。」

犯人は服を噴水の中にいれて洗ったわけじゃありませんから。」

「じゃあ・・・」

「小さな桶に水をいれ、それを被ったんです。

ほら、銭湯とかでもやるでしょ？

ザバツと・・・。」

「でも・・・そんな桶、どこに隠すの？」

「・・・そうか！！

大きな鞆ですよ。

早乙女の愛用してる鞆、結構大きな鞆だったらしいです。

それなら、入りますよ、きつと！」

「なるほど・・・ずっと大きな鞆を愛用していれば

犯行時にいきなりその鞆を持ってきても

怪しまれない、ということか・・・」

「はい。それに、犯人は合羽を着ていたそうなので

濡れても平気だし・・・

しかも、犯行時に雨が降っていたのであれば合羽が濡れてても誰も怪しがったりしませんからね。」

「ああ・・・なるほど。」

「だから犯人は雨の日じゃなければならなかったのか・・・」

「でも、アリバイはどうなるの？」

「ああ、それですか。」

新一はホワイトボードの前まで歩いて

ペンのキャップを外し、地図を書いていった。

「？」

「ここが犯行当時犯人が飲んでいた居酒屋です。」

そして、ここが犯行現場。間に大通りがあるだけで距離的には近いんですよ。」

「でもね、工藤君。」

居酒屋の入り口はこっちなのよ？そうなたらここを通過ってこの道に入って・・・

ここを曲がってって・・・走っても2分とかかってしまうのよ。

そこで殺害して、凶器を・・・ってやってたら五分以上かかるわ。」

「トイレはここなんですよね？」

「え？ええ・・・」

「この窓・・・結構大きくて大人でも出入りできるそうです。」

しかも、窓のある場所は隣の店との間で一目にも付かない場所らしいので

出入りしても見つからないんですよ。」

「なるほど・・・」

「・・・高木君、そうとなれば犯行時にこの間から出てきた早乙女の姿を見た目撃証言を探しにいくわよ。いいですよ、警部。」

美和子の言葉に目暮は深く頷く。

「行くわよ!」

「は、はい!」

B u t t e r f l y 2 1 (後 書 き)

ささ・・・どんどん真実へと近づいていきます・・・。

「・・・ねえ、藤峰。」

「ん？」

「縁談話がもちあがつてんだよね。」

「へえ。」

「どうやったら断れるかな。」

「んなの、普通に嫌です。って言えばいいだろ。」

「それができたら苦労しねーよ・・・
そっだ・・・見合いの日、私をさらってよ。」

「は？」

「・・・だめ？」

「そういうのは自分で断らねえと。
いくら嫌な縁談話でも、相手に失礼だろ。」

「そうだけど・・・」

下をうつむく。

そんなアゲハの姿に父親のことがバレたら

怒られるだろうな・・・と考える。

もしかしたら、一番酷なやりかたで傷つけるかもしれない。

「今の話し聞かなかったことにして。」

「あ、ああ・・・」

「ごめん。」

アゲハが謝ったとき、新一の携帯になる。

”目暮警部”と表示されていた。

「わり・・・」

それだけを残して屋上をあとにした。

「はい、工藤です。」

『工藤君、とにかく急いでこっちにきてくれないか？』

「え？」

バン
ツ

「早乙女！先生には早退って伝えてくれ！
具合悪いとか言ってさ！」

「また！？あんた何回目よ！！」

「わり！じゃ、頼むぞ！」

「もう！勝手なことばかりいつちゃってさ！
・・・そんなところも好きなんだろうな、あたし・・・」

走り去る新一の後姿を見つめながらアゲハは呟いた。

B u t t e r f l y 2 2 (後書き)

キヤー！

まさかのアゲハちゃん、乙女発言！！

「警部！」

「工藤君！！取り合えず、これを見てくれ。」

指されたのはビデオテープ。

アゲハの家に取り付けた隠しカメラだった。

「偶然、映ってっていたんだよ。」

早乙女の決定的瞬間がね……………」

「決定的瞬間？」

「まずはこれを見てちょうだい。」

そこには、麻薬と凶器と一緒に金庫に入れるアゲハの父の姿が映っていた。

「ほんと、工藤君のおかげよ。
数少ないカメラをよく設置してくれたわ・・・
場所によっては映されない場所もあるから・・・」

「いえ・・・場所にも限度があるので・・・
運がよかったんだと思います。」

「運も実力のうちよ。」

ウィンクしてみせる美和子に新一は笑みをこぼした。

B u t t e r f l y 2 3 (後書き)

すんごい短くてすみません!!

次回も宜しく願います。

B u t t e r f l y 2 4 (前書き)

アゲハちゃん視点です！

ポーツと

藤峰にもらった本を眺めた。

白い机に寝そべって・・・眺める。

「面白い本だつてことは、わかってるんだけどな・・・
続きだつて気になるし。」

でも、続きよりも気になるものが邪魔をするんだ。

開いてもそればかり頭にちらつく。

「っはあ。目を閉じても考えちゃう。」

私はピンクのフリルがついた布団に

どんっと腰をおろして本を片手にとった。

「はあ。」

再度、ため息をつく。

ピーポーピーポーツ

一瞬、救急車かと思った。

「パトカー？
やだなー、何があっただろ？」

窓をふと見る。

赤いランプが見えた。

事件でもあったのかな？

明日、ニュースにでもなっていたりして。

陽気なことを考えてた。

キキイ

寝ようとしていた私は動きを止めた。

「近くに止まった・・・まさか近所!？」

私は衝動に駆られて窓に飛びついた。

「
・
・
・
んで家に
・
・
・
？」
」

そして、パトカーから出てきた人物に尚も驚いた。

周りの男子より少し髪が長くて

黒ぶち眼鏡で

スラッとした長身で・・・

工藤新一に凄く似ているイケメンで・・・

私の好きな人。

「藤峰！？」

B u t t e r f l y 2 4 (後書き)

さてさて・・・波乱の予感!?

タタタタッ

階段を駆け下りる。

玄関先では無数の警官が居た。

「早乙女和彦・・・麻薬密売と殺人罪の容疑で逮捕する。」

「ち、ちょっと待ってよ！

なんでオヤジが連れて行かれないやなんないの！？」

人前では『パパ』と呼んでいた事なんて

気にも留めなかった。

「第一、殺人罪って？麻薬密売ってなによ！

オヤジはね、絶対そんなことしてない！

証拠もなにもないのに、勝手につれてくなんて・・・
どうかしてるんじゃないの！？」

「わるいわね・・・証拠ならちゃんとあるのよ。」

美和子はビデオテープを片手に持った。

「それがなんなのよ。」

「ここに麻薬と凶器を隠してる貴方のお父さんが映ってるの。」

これは立派な証拠品よ。」

「なんでそんなものが・・・」

「訳あってわしらが派遣した探偵がこの家にカメラを設置してくれただよ。」

そのおかげでこういう証拠品が得られたっていうことだ。」

「カメラ？」

探偵ってなに？まさか、この使用人の中にいるっていうわけ！？」

「いえ、そこには居ませんよ。」

「じゃあ誰なのよ！？」

「・・・俺だよ。」

「え．．あ、藤峰！？」

信じられないものを見たような、そんな気持ちが

アゲハの心の中を渦巻いた。

「探偵って・・・アンタが？」

・・・まさか、探偵って・・・」

変装を解いてく新一の姿にアゲハは驚きを隠せない。

似ている。

ただそれだけだったのに・・・

まさか、本人だったなんて。

「く、工藤新一！？」

「うそ・・・」

「・・・人の家にカメラ設置するなんて、
そっちこそ犯罪者なんじゃないの！？」

探偵だからってやって良いことと悪いことがあるでしょ？」

「いえ・・・」

彼は僕たちが派遣した探偵。

カメラ設置は警視庁から命令です。
よって彼に責任はありません。」

「なに、それ・・・」

クソオヤジ

だなんて言ってもアゲハにとっては

たった一人の父親。

母親が居なくなってから

たった一人の身内。

殺人犯だろうが麻薬密売犯だろうが

大事な父親には変わらない。

「パパ！なんとか言ってよ！！」

「・・・アゲハ。この人たちの言うとおりだ。」

「何弱気になってんのよ！」

「弱気なんかじゃない。」

「事実なんだよ。・・・すまん、アゲハ。」

「私が聞きたいのは謝りの言葉じゃない！！」

「本当にすまん・・・」

「謝るくらいなら・・・なんでやったのよ！！」

「弱かったんだよ・・・」

「え？」

「欲の出すぎだった・・・ってところだ・・・
結局、暴力団に入ろうとしてしまったし・・・」

「入ったの！？」

「いや、入ったとはいえ、下っ端の下っ端。
本部にはたどり着いてない。」

「刑事さん、だから私に石坂組のこと聞いてもなにも出てきません
よ。」

「知ってますよ。」

彼が・・・工藤君がそれも全て見抜いてましたから。」

「え？・・・君は、本当にすごい人間だ。

私はこれでも人を見抜く力があつたんだがね・・・
君の事を見抜けなかった。」

「・・・それは、貴方があの時・・・仮面を身につけてたからですよ。」

「仮面？」

「僕が夕食をご馳走になったとき・・・
貴方は演技、してましたよね？」

大企業の社長、家庭では優しき父・・・
という人物を、貴方は演じてた。」

「すごいな、そこまでわかってたとは・・・」

「わかりますよ。

あのとき、一瞬間がありましたから。」

「隙・・・か。」

小さくつぶやいた。

そして、パトカーへと乗せられる。

アゲハはそれを呆然と眺めていた。

「早乙女さん。大丈夫ですか？」

「・・・なにソレ。

いきなりなんで敬語？」

「・・・俺は工藤新一です。

探偵の・・・ただの男子高校生藤峰新じゃありませんから。」

「探偵の顔、つてわけ。

じゃあ、聞くわ。探偵さん。

この家は取り上げられるのかしら？」

「いや・・・ここはもうローンも払われてますし
手放す必要はないですよ。ですよね？佐藤刑事。」

「ええ、ただ・・・これだけの使用人を養えるか。
そして授業料・・・いろいろあるけど、大丈夫？」

「はい。大丈夫です。」

「そう。じゃ・・・」

美和子はそういうと去っていった。

「・・・ねえ、藤峰新に戻ってくれない？
言いたいことがあるの。姿はそのままでもいいからさ・・・」

B u t t e r f l y 2 5 (後 書 き)

さあ、アゲハちゃん・・・
何を言う気なんでしょうか！？

「ねえ、藤峰。

あんたはさ、最初から父親のこと知ってたの？」

「ああ。」

「知ってて近づいたの？」

「ああ。」

「父親を捕まえるのが目的であたしに近づいたの？」

「・・・そう、だ・・・」

バンッ

アゲハは本を持ってきたまま階段を駆け下りていた。

手に持っていた本を新一にぶつける。

「さいてー!!」

友達だっと思ってたのに!

本気で、本気でそう思ってたのに!!」

「さ、早乙女!俺の話を・・・」

「聞きたくない!!」

言い訳なんて絶対に聞かない、聞きたくない!

帰って・・・本を持って帰ってよおおおお!!」

泣き崩れるアゲハに新一はかける言葉もなく

言われるがまま、帰っていった。

「さいてー、さいてー・・・」

藤峰のバカヤローーーーー!!!!!!!!」

「はい。」

「菊池！」

「駒田！」

「はあい。」

「斉藤！」

「はい！」

「早乙女！」

「・・・」

「・・・早乙女？」

「なんだ、あいつ。サボりか？」

「先生、アゲハ、朝は一回も見えてません。」

「無断欠席か・・・」

新一はアゲハがいつも座っている場所・・・空席を見つめた。

苦しめた、傷つけた。

と心の中でつぶやきながら。

B u t t e r f l y 2 6 (後 書 き)

もう寒い時期となりました。

みなさん、風邪だけは気をつけてくださいね！

コンコン

「お嬢様。

他の使用人は荷物をまとめて先ほど・・・おやめになりました。」

「そう・・・貴方もやめていいのよ。」

「私は・・・残ります。」

そっぴいきたのは

50ほどの女性・・・。

使用人頭の三郷 忍だった。

「私にはお給料など必要ございません。

なにせ、あとは老後人生が待ってるだけですからね。
お嬢様と2人で旦那様を待っております。」

「三郷さん……」

「さて……お夕食作りましたから。

一緒に食べましょう？お嬢様。

だから早く、出てきてくださ……」

バンッ

「おっと……お嬢様？」

「三郷さん、ありがとう！本当に……」

「フフ、私はいつもお嬢様の味方でございますよ。」

三郷の胸の中で泣くアゲハの頭を優しくなでる。

「……そういえばお客様がいらっしゃるんですよ……」

「お客様？」

「今、お呼びになりますね。」

「・・・お客様ってアンタか。
なんの用よ・・・もう顔も見たくないの。帰って。」

「早乙女、最初に言いたいことがあるんだ。」

「何？」

「ごめん。」

「え？」

「しょうがないとはいえ、傷つけてごめん。」

「・・・」

「まあ、最初近づいたのはそのためだったのは事実。だけど・・・今までお前に言ったこと全部うそじゃないから。」

「え？」

「最初はさ、可愛くねえやつ・・・とかいろいろ思ったんだけど・・・」

「思ってたんかいっ！」

「でも・・・今は違う。今は・・・大切な・・・」

「た、大切な・・・？」

「友達だと思ってる。」

ズコッ

「あ、そう・・・」

「？」

「プッ クスクス・・・」

「おっかしー！わざわざそれ言いにきたの？
バツカじゃないの、アハハハハ！」

「そこまで笑うこたねえだろ・・・」

「ごめんごめん。」

ま、私は過剰になりすぎちゃってごめん・・・
友達ね、友達・・・クスクス」

「完璧バカにしてんだろ・・・」

「してない、してない。」

笑いを必死にこらえた。

「ねえ、友達つてさ・・・
藤峰新として？それとも・・・」

「もちろん、工藤新一として、に決まってるだろ？」

「・・・工藤新一と友達かぁ。」

友達に自慢できちゃうね。サインしておらって・・・それを売る
う！」

「オメーなあ・・・」

いつものアゲハに新一は心底ホッとした。

B u t t e r f l y 27 (後書き)

少女漫画のラブシーンみたい。

なんて思った方！

気のせいですよ。

うん、気のせい！！

無事、4週間で事件を解決した新一は
帝丹高校へと戻った。

「工藤！久しぶりだな。」

「ほんと、事件解決おめでと！」

「工藤・・・お祝いに俺の熱い口付けを・・・」

「気色わりいことすんなよ！」

「んだよ、俺の唇がきたねえってか！」

「そっいう意味じゃねえよ！」

「新一君が戻ってからますます活気に溢れてきたね。」

「うん。」

「そりゃそうよ・・・」

工藤君がクラスのムードを整えてるような
もんなんだから。」

「ま、そりゃそうよね。」

なんたつて、事件を解決させてしまふ名探偵なんだからさ。
・・・でも、女房をほったらかすのは駄目よね。」

「園子・・・」

「新一くん、アンタ、蘭に愛してる。」

の一言でも言つてやったの？

じゃないと、いくら無事に戻ってきたからって

蘭は不安で不安でたまらないのよ？」

「ち、ちよつと園子！」

私、そんなことないから!!」

「なあに言つてんのよ!!」

「そうよ、蘭!!」

ここは工藤君からの熱い口付けくらいないと!!」

「口付けってね・・・」

蘭はワナワナと震える。

「・・・あ、やりすぎた。」

「おせえよ、気づくの。」

「ど、どしよ・・・し、新一君！
あとは宜しく。」

今がお昼やすみなのを良い事に一斉に教室から
飛び出していった。

「蘭。」

「なによ・・・」

蘭は怒っていたわけではなかった。

涙をこらえていた。

「ただいま。」

「・・・っ！」

「ごめんな、こんな妙な事件・・・
引き受けちまって。」

「新一が・・・悪いわけじゃないもん。」

「ほんと、ごめんな・・・。」

「謝らないで・・・。」

新一の胸の中で泣く蘭の頭を優しくなでる。

そんな2人の姿をほほえましくクラス一同が見ていた。

B u t t e r f l y 2 8 (後 書 き)

まだ、波乱の予感・・・！？

「今日は事件のお呼ばれないんだね。」

「ああ。」

この間の一件で警部たちもしばらく俺を呼ばないように
頑張ってくれてるらしい。」

「頑張ってたね・・・」

まあ、新一は普通の高校生なんかもんね。」

「そうだな。」

「推理が異常なくらい好きな。」

「一言余計。」

「あ、やっぱり?」

なんて他愛のない一日を過ぎるはずだった。

ピンポン

「誰だろ？」

私、ちよつと出てくるね。」

「ああ。」

「はい。どちら様ですか？」

「早乙女といいます。」

「事件の依頼かな・・・」

蘭はつぶやくと力チャツとドアをあけた。

「はい。」

「・・・あの、ここ工藤さんのお宅ですね。」

「はい、そうですけど・・・」

「あの、失礼ですけど貴方は？」

「え？えーと・・・なんて言ったらいいんでしょう・・・」

素直に『彼女』だと言えない蘭は一人でシドロモドロする。

「蘭、誰だった？・・・って・・・」

「あー！藤峰！！」

「早乙女！？」

「知り合いなの？」

「ああ。俺が潜入調査した高校のクラスメート。」

「詳しく言えば、その犯人の娘。ってわけ。」

「え！？」

蘭が驚いたように目を見張り、新一に振り返った。

新一も首を縦に振る。

「そうだったんですか・・・」

「まあ、とりあえず あがれよ。」

「うん。おじゃまします。」

「あ、私紅茶持って来るね。」

「ああ、頼む。」

「ねえ・・・彼女？」

「え？ああ・・・幼馴染。」

「そうなの？」

アゲハの心に灯りがともる。

「兼恋人。」

「・・・やっぱり彼女なんじゃない。」

とたんに崩れ落ちる。

「まあ・・・そうだな。」

「まあ、工藤新一に恋人が居ないわけないと思ってたけどね・・・あれだけの美人。アンタだったらイチコロで落ちるだろうし。」

「・・・こんなこと、お前に言ったら笑われるかもしれねえけど・・・俺あいつは駄目だと思ったんだ。」

「え？」

「俺がどんなに好きでも駄目だと思ってた。ずいぶんほったらかしにしてたし・・・愛想がつきてもおかしくない。」

「・・・」

「あいつは生涯俺が好きになった最初で最後の女だと思う。」

「カッコいいことばっか言っちゃって。」

「ほんとだよな。」

心の痛みを隠してアゲハは笑う。

カチャ

「どうぞ。」

あ、これさつき焼いたクッキーです。
よかったら食べてくださいね。」

「あ、ありがとうございます……。」

「早乙女、お前が気を使うなんて……。」

「あんた、あたしを何だと思ってるのよ!。」

「……クスッなんか園子みたい。」

「……そーいや、そうかもな。」

「園子?。」

「ああ……私の親友鈴木園子……
すっごく貴方に似てるの。」

「令嬢には見えないお調子者っつか・・・」

「それ、園子に言ったら怒られるよ？」

アゲハは頭の中で少し想像してみる。

「どんな子なんだろ・・・」

「これが、写真よ。」

自分が想像していたのとは全く異なったことに
驚きを隠せない。

「あ・・・自己紹介、まだだったよね。
私は毛利蘭。よろしくね。」

「早乙女アゲハ。よろしく。」

B u t t e r f l y 2 9 (後 書 き)

ま、まさかの修羅場!?

でもない・・・

アゲハの突然な登場から

早一時間が経過していた。

ほのぼのと紅茶を飲む蘭に対して、

アゲハは完璧火花を散らしている。

「アゲハちゃん、紅茶のおかわりいる？」

「あ、お願い。」

「ちょっと待っててね。」

ふわっと笑って台所へと向かう。

「藤峰・・・じゃなかった・・・
ねえ、アンタのこと何て呼べばいい？」

「なんでも。」

「なんでもが一番困るんだけど・・・。
んーじゃあ・・・新一。でいい？」

「・・・ダメ。」

「なんでもいって言ったじゃん。
ウソツキヤロー。」

「わりいわりい。」

たださ、蘭以外の奴に名前と呼ばれるのはちょっとさ・・・。
ほら、他の男が蘭って呼ぶの、嫌だと思っし・・・。
あいつもそうだと思っから。」

「・・・あつそ。」

じゃあ、新くんがいい？藤峰新だったせいか、
そっちのほうがしっくりくるし。」

「ああ。」

新一が承諾したとき、ちょうど蘭が紅茶を持ってやってきた。

「はい、どうぞ。」

「ありがとう。」

んー、おいしい。

そっぴゃ、新くん今日は事件とかないの？
意外と暇なんだね、探偵って。」

「ああ・・・今日はたまたまなの。」

いっつもは事件で出かけちゃって、

睡眠時間が一時間とか、二時間とかなくらい忙しいの。

だから、今日はたまたま。」

「へえ。」

蘭に悪気はない。

普通に返したつもりだった。

しかし、アゲハにはそうは映らない。

『彼女としての余裕』だと思っていた。

見下されているような感じがした。

「・・・あたし、帰るわ。」

「え？」

「あんまり長居できないのよ。」

「そつか・・・残念。」

また、来てね。アゲハちゃん。」

「うん。」

じゃ、また明日来るわ。」

唐突なアゲハの言葉に

啞然とする2人。

アゲハの宣誓布告だったとは

このとき、思ってもみなかった。

B u t t e r f l y 3 0 (後 書 き)

さあ、アゲハちゃんは
どんな手をつかってくるのでしょうか!?

「やつぽー!!」

「また来たのかよ。」

「なによー、いいでしょ？」

「つてか、学校はどうした、学校は!!」

「行ってるわよ。ちゃあんと。」

「学校行ってからこっちに来てるの。文句ある？」

「ねえけどよー・・・」

あの日から毎日、アゲハは工藤邸へと通っていた。

それは、あの人の良い蘭でさえ困るほど。

「今日、ハンバーグだけど・・・アゲハちゃんも食べていく？」

「うん！！」

「じゃあ、用意するね。」

パタン

「ハンバーグかあ、最近食べてないなあ。
楽しみっ」

「おい、少しくらい遠慮しろよな・・・
ここんところずっと蘭にご馳走になってるだろ。」

「なによー、自分だって毎日作ってもらってるくせに。
人のこと言えないんじゃないの？」

そう言われれば、何も言えない。

「とにかく、食ったら帰れよ。」

「ええ、ひどーい。」

夜道にこーんなか弱い女性を帰らせるの？」

「ああ。」

「信じらんない、信じらんないっ
ひどすぎる！野蛮だわ、野蛮！！」

「野蛮ってなあ・・・」

「ねえ、いいじゃない 送ってつてよお。」

「わかった。」

「えっほんと！？」

「金出すからタクシーで帰れ。」

「・・・最低！！新くんの意気地なし！！」

「・・・あのよお、最近思ってたんだけど
お前、キャラ可笑しくなってるかい？ずいぶん違うけど・・・」

「あたしは元からこんななの！
だけど、心開けなかったからあんなツンケンしちゃっただけ！！
ほんとこんなキャラなんだから！！」

「んな、怒んなくてもいいだろ・・・」

傍からみれば恋人同士・・・

「あ、蘭ちゃん。」

「えっと・・・お夕飯、準備できたよ？」

「わあい！新くん、行こ行こ！」

「へいへい・・・後で行く。」

これ片付けたらすぐだから。」

「もぉ・・・蘭ちゃん、あんな奴ほっとこ。
分かんず屋なんだから。」

「うん・・・」

完全に立場逆転。

「ねえ、蘭ちゃん。」

私と新くんが仲良くして・・・いや？」

「え？」

「あんな風に傍から見れば恋人同士みたいなの・・・
してたら嫌？」

「うーん・・・全然。」

蘭の意外な言葉に哑然とする。

（え？だって・・・あんなに悲しい表情して・・・
強がってないで、嫌なら嫌って言えばいいのに。）

「じゃあ、もっとくつついても全然平気？」

「んー・・・ちよつとヤキモキはするけど・・・
大丈夫だよ。」

「・・・蘭ちゃんって、意外と新くんが好きじゃないんだね。」

「え？」

「そこまで新くんが好きなわけじゃないんでしょう？」

ただ、顔も頭も良くて、スポーツが出来て・・・
おまけに名探偵。だから付き合ってるんでしょ？」

アゲハの声のトーンが段々低くなっていく。

「結局、工藤新一っていう1人の男を
蘭ちゃんは好きになったわけじゃないんだよね？」

B u t t e r f l y 3 1 (後 書 き)

次回も宜しくお願い致します

B u t t e r f l y 3 2

「結局、工藤新一っていう1人の男を
蘭ちゃんは好きになったわけじゃないんだよね？」

「好きだよ。」

「嘘!!」

だったらそんなに平然としていられる訳ないじゃない!!
あたしだったら嫌だもん。
他の女の人と自分の彼氏がイチャつくの・・・」

アゲハは強く言い放つ。

「あたしに譲ってよ、新くんを・・・
あたしは好きだよ!新くんが。
どうしようもなく好きなの。」

「・・・そっか。」

とりあえず・・・座ろっか。」

穏やかな口調の蘭に思わず間拔けな声が出てしまいそうになった。

「そうだね・・・」

私、平然としすぎてたね。」

「え？」

「でもね、私は新一が好き。

これには何の嘘もないよ。」

「・・・」

「確かにね、他の女の子に「新一」って呼ばれるとか、ベタベタされるのは・・・良い気分じゃないよ。逆に、ちよつとヤキモチ妬いちゃう。

でも、半分以上は平気なの。」

「どうして？」

「・・・新一を信じてるから。」

「信じ・・・？」

「うん。」

私を好きだつて言ってくれた新一を・・・

私は信じてるから。

だからね、平気なの。」

まっすぐな瞳。

「アゲハちゃん、新一が本当に好きなんだね。」

「うん。」

「でも、私も新一が好きだから・・・
だから、アゲハちゃんの応援はできないけど
友達になれたらな、って思ってるの。」

「・・・蘭ちゃんのそういうところを
新くんは好きになったのかもね・・・。」

「え？」

「どうして、そんなに新くんを信じられるの？」

「うーん・・・幼馴染として、何年も一緒に居たからかな。」

「そっか・・・。」

どこか、すっきりしたように呟く。

「ねえ、新くん・・・モテるけど

告白される回数、段々減ってきてると思わない？」

「そういえば……どうしてそんなこと……」

「わかるよ……」

（皆、蘭ちゃんには適わないって諦めていくってことが……」

「あたしね、無駄だってわかってて突っ走るほど不器用じゃないのよねえ。」

「え？」

「蘭ちゃんの一言でどれだけあたしが無力なことしてたか……実感したわ。」

最初はね、絶対奪ってやるー！
って燃えてたの。」

「……うん。」

「でも、結局ダメだったわ。」

新くんは貴方以外に好きになったりする人なんて絶対現れない！
あたしが誓うー！！」

「アゲハちゃん……」

「あたしが言うのもなんだけどさ・・・

絶対新くん、蘭ちゃんのことを死ぬ気で守ってくれると思うから・

・

どこまでついていきなよ。」

「うん・・・まあ、そこがたまに困るんだけどね。

私のために命落としそうになったこと、何度もあるし・・・」

「え！？そうなの？

危ない男ねー。気をつけてね、蘭ちゃん！」

「うん。」

こんな女子のトークを新一が最初から最後まで聞いていたとは・・・

思ってもいなかった。

B u t t e r f l y 3 2 (後 書 き)

次回、最終回です!!

っと言っても・・・

今日で仕上げてしまうつもりですが・・・。

L a s t B u t t e r f l y

「最近、早乙女来なくなっとな。」

「そうだね。」

「なんでもバイト三昧で忙しいらしいよ。」

「へえ。」

「あの一件で苦労してるもんな・・・」

「やっぱり、事件はお蔵入りしてもらったほうが良かったか・・・」

「嘘ばかり言っちゃって。」

「何だかんだ言って新一は絶対そんなことしないよ。」

「新一にとつて、犯罪がどれほど許されないことか
私は知ってる。」

「蘭・・・」

「アゲハちゃんにとつても・・・」

「私はこれでよかったって思ってる。」

「だって、なんか清らしい顔してたし。」

「そうだな。」

新一はもう一度、小説に目を通す。

「そんなことより・・・

アゲハちゃんってギャルだって聞いたけど・・・
そんなんでもないんだね。

だって、ストレートだったし。」

「ああ・・・前はパーマだったんだよ。

しかも脱色してたし・・・

今は黒に染めてるみたいだけどな。」

「へえ。」

『

』

「あ、いけない・・・テレビつけたまんまだった・・・
消してくるね。」

「ああ・・・」

「し、新——！！ちょっと来て——！！」

しばらくしてから蘭が大きな声で新一を呼ぶ。

「なんかあつたか!？」

「これ!これ見て!!」

『衝撃のデビューを果たした

亜夏葉 乙女さん。

昨日発売されたMilk chocolate 11号の
表紙を飾りました。』

「あげは・・・おとめ?」

「これ、アゲハちゃんじゃない!？」

『Milk chocolate の表紙を飾るのはモデルの夢。
イメージに合うモデルは今のところいない。と編集者も言っ
てお
り、

今まで表紙は全てイラストだった。

しかし・・・2011 11号でMilk chocolate

初めての表紙を飾ったのは
新人の亜夏葉 乙女さん。』

「だって、この顔・・・」

「っていうか、ギャルだったころの早乙女ソックリだ・・・」

「ソックリなんじゃなくて、本人なんじゃないの？」

『たまたま亜夏葉さんが所属しているモデル事務所に居た
編集者によると、モデル事務所に乗り込んできた彼女の勇ましさに
惚れた。と言っていました。』

「やっぱり、アゲハちゃんだよね。」

「そうだと思う。」

ピンポン

「はい・・・あ、アゲハちゃん!？」

「やっほー」

ね、ね、ビックリした？

その顔はビックリしたよねえ！」

「ビックリしたよ!!」

「やったね、大成功！」

いやさー、あたし蘭ちゃんに負けちゃったし・・・

ちよつと悔しかったんだよね。

だから、脅かしてやろうと思ったわけ。

芸能人と電撃結婚しようとか思ってたんだけど

やっぱり難しいでしょ？」

何を言ってるんだ、この人は・・・

と蘭は困ったように笑い始める。

「で、考えたのが、私の芸能界デビュー

売れようが売れまいが・・・

デビューしたってことに、驚かせたかったの！」

「へ、へえ・・・」

「ああ、でも驚いてるみたいでよかった！

これでスツキリ

振られた甲斐があるってもんよ！！」

「よ、よかったね・・・。」

キャツキャツ

と笑うアゲハに蘭は苦笑いを浮かべる。

「アゲハちゃんは、売れるよ・・・」

「え？」

「アゲハちゃん、名前の通りアゲハ蝶みたいに
どんどん可愛くなって魅力的になってるもん！

それに・・・Milk chocolate の表紙飾るほどの
実力があるってこと！

だから、絶対に売れるよ。

今度は私が誓うから！」

「・・・ありがとう。蘭ちゃん。」

アゲハがそう微笑みかけたとき、

新一が気だるそうにやって来た。

新一が驚きの声を出すまで・・・

あと3秒。

L a s t B u t t e r f l y (後書き)

はい、完結いたしました！！

今まで更新できなかったぶん、
ドバツと更新させていただきました

今まで読んでくださった方々・・・
何でも言って飽きてるかもしれませんが
本当に感謝してまいります。

桜桃は皆様のおかげで頑張っております。

今後も宜しく願います！！

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4326x/>

Butterfly

2011年11月20日00時09分発行